梶井基次郎「Kの昇天（或はKの溺死）」

――「私」の二重性について――

水島　佑

一、序

「Kの昇天（或はKの溺死）」は、ある日突然、「あなた」という、「私」と一面識もない人物から、Kの溺死の原因について思い悩んでいるような手紙が送られてきたことから始まる物語である。

これまで、「Kの昇天（或はKの溺死）」という作品の研究では、Kという人物を中心に据えた考察が多くを占めていた。そこで、今回わたしはこの作品を、語り手であり、作中でKのほかに唯一、具体的に描かれている人物である「私」を中心に考察しようと思う。

成立は、ノート第八帖（二一―二四）九月十七日、十八日日記の記述によれば、大正十五年九月十八日。初出は、『青空』第二巻第十号　通巻第二十号（大正十五年九月二十五日印刷納本、十月一日発行、一―一〇頁）である。本文のタイトルは「Kの昇天（或はKの溺死）」。末尾に「―九月十八日麻布飯倉にて―」との付記がある。[1]

考察を述べる前に、本作品の概要を記すこととする。

K君の溺死の原因について思い悩む「あなた」からの突然の手紙によって、「私」がK君の彼地での溺死についてはじめて知り、大層驚くと同時に、「私」自身、奇異だと感じながらも「K君はとう〳〵月世界へ行つた」と思う所以を、K君との影をめぐる不思議な出会いをもとに、「あなた」に語りかける。「私」は病気の療養のために訪れていたN海岸でのはじめての満月の夜、眠れず旅館を出て砂浜へと向かい、

海を眺めていた。ふと目を砂浜に転じると、「私」以外のもう一人の人を発見する。その人影は「私」に背を向けて、砂浜を前に進んだり、後ろに退いたり、立ち留まったりを繰り返している。「私」は段々とその人影に注意を払うようになる。口笛を吹いてみるなど気を引こうとするものの効果はなく、ついに自らその人影に声をかける。砂浜で一体何をしていたのかを問うと、人影の正体であるK君は、自分の影を見ていたという。K君は影をじっと見つめていると、段々と自分の姿が見えてくる、そして次第に、影の自分は彼自身の人格を持ちはじめ、それにつれて此方の自分は段々気持ちが杳かになって、或る瞬間から月へ向かって、スースーッと魂が昇って行くという。

この不思議な出会いをきっかけに二人は毎日訪ね合ったり、一緒に散歩したりするようになった。その一と月程の間に、私はやや健康を取戻し、此方へ帰ることに決めた一方で、K君の病気は徐々に進んでいた。「私」は影がK君を奪ったという直感をもとに不幸な満月の夜について語りだす。

二、「あなた」の存在

作品の冒頭から突如現れ、最後まで詳しく語られることのない「あなた」という人物と「私」との関係について、いくつかの先行研究を挙げながら考察していきたい。

陳蘇黔氏[2]は、「Kとは生前からの知り合いという間柄が窺える。（中略）『あなた』について、手紙を書くきっかけとなるKの溺死を知らせてきた人物ということ以外に、何ら言及がないことに、意図的なものが読める設定（語り手の意図するものかどうかは別として）が、このテキストにあるように思える。」と述べるに留まっているが、大塚常樹氏[3]は、そこからさらに一歩踏み込んで、「『あなた』については、『私』が知り合うよりも前からKと懇意であったように読めるし、海岸ではKのそばにいなかったこと、Kの死に方に関心を持つ人物であることが推測される。さらに『あなた』という呼びかけ方からは、親や先生筋でないことが明らかで、従って、親友、恋人等は考えられよう。」と述べている。一方、島村輝氏[4]は「この物語のなかで、『私』に返事を書くように動機づける手紙を書いた『あなた』は『私』にとって《探偵》の

役割を演じているということであり、この物語、つまり『Kの昇天』というテクストは、全体としてのその《探偵》である『あなた』に対して『Kの溺死』についての《容疑者》である『私』が為した《釈明》《弁明》といった観点から読むことが可能だろうということである。」というように、先の二人とは少し異なる考察をしている。

たしかに先行研究がいうように、わざわざ面識のない「私」に手紙まで送り、Kの死因についての情報を求めている点で、「あなた」とKとの関係は親密であったように感じられる。

しかし、大塚常樹氏のいうように「あなた」がKの親友や恋人、恋愛の対象となる人物であったとしたならば、Kの最期について切実に知りたがっている人物に対して、「K君はとう〳〵月世界へ行つた」など「私」自身も「奇異なこと」だと思う考えを、時には言い切るような形で、わざわざ丁寧に返信するだろうか。そのような点で、島村輝氏の「あなた」が探偵の役割を担っているという考えは、恋仲とみるよりは理にかなっていると考える。しかし、探偵のように真実を追及しようとする役割をもった人物に対し、先ほども述べたような「私」自身も甚だ現実離れしていると感じる話を、釈明や弁明として話すことは、却って不利であり、苦しい言い逃れであることを露呈してしまうのではないか。

そこで、ここからは「私」が語る、「私」と「あなた」の関係性について考察を深めてみようと思う。

作品冒頭部では、「そして僅か一と月程の間に、あの療養地のN海岸で偶然にも、K君と相識つたといふ様な、一面識もない私にお手紙を下さるやうになつたのだと思ひます。」（傍点筆者、以下同様）とあるように、「あなた」とは赤の他人であり、Kとも知り合ってから日が浅いことを強調する。続けて「私はあなたからのお手紙ではじめてK君の彼地での溺死を知つたのです。私は大層おどろきました。」と、Kの死という出来事について、第三者の立場から衝撃を受けている。しかし、その直後には「と同時に『K君はとう〳〵月世界へ行つた』と思つたのです。」と、前の文でKの死を初めて知り、驚いている人物と同一人物とは思えないような発言を以て、Kの死を、まるでおとぎ話のように捉えている。そして、さらに興味深いことに、その次には「どうして私がそんな奇異なことを思つたか、それを私は今こゝでお話ししようと思つてゐます。それは或はK君の死の謎を解く一つの鍵であるかも知れないと思ふからです。」と述べていることで

ある。

これらが、作品の冒頭部という、物語の方向性を決定づける部分に存在すること、そしてこれらを一続きに発した人物が、「私」という、物語を支配する語り手であり、Kと接触を持つ人物であるということは極めて重要なことである。

なぜなら、「私」というこの物語を語る人物の立場が、先に述べたように、落ち着きなく変化しているということは、それ以後の「語り」にも注目すべきだろう。

「私」と「あなた」との関係が窺える部分には、他にも以下のようなものがある。

・御存じでせうが、それはハイネの詩に作曲したもので、
・あなたにもそれが突飛でありませうやうに、それは私にも實に突飛でした。
・これがK君の口調でしたね。
・聞きたゞしては見なかつたのですが、或はそれがはじまりかも知れませんね。

一つめの書き抜きでは、「私」がKと出会うことになる夜、砂浜で人かげ（後のK）を見かけ、その人影に興味を持ち、「私」が何とか気を引こうと、口笛で吹いた曲についての話の際に、ご存知だとは思いますが、と「あなた」に配慮する様子が描かれている。二つ目の書き抜きは、「私」がKに声をかけた後、漁船のともで「私」がKに浜辺で一体何をしていたのかと尋ねた時、Kが躊躇しながらもゆっくりと、Kにとって影がどういうものなのかという告白の瞬間の場面である。ここでも、「あなた」と同様に私にも突飛なことでしたと、「私」が「あなた」と同じように思っているのだという一言を、意識的にそっと添えているのだ。そして、Kが自身にとって影が如何に魅力的なものであるかと語る中で、影の光源は、「電燈の光線のようなものでは駄目だ。月の光が一番いゝ」と言った直後、その訳はK自身の経験によるものなのだと、Kの言葉を「私」が間接話法で再現し、「これがK君の口調でしたね」と「あなた」に促すのである。最後のものは、Kが「私」に朝、「海の眞向いから登る太陽の光で作つたのだという、等身のシルウエット」を見せてくれた際に、高校のころの思い出を話すKについて、「私」は「そんなことまで話すK君でした。聞きたゞしては見なかつたのですが、或はそれがはじまりかも知れませんね。」と意味深な言葉を残す。

これら四つの書き抜きからは、「あなた」と「私」が妙に親しげな様子が窺える。最初の三つに関していえば、もともと「あなた」が同意することが前提となる言い回しであるといえるし、四つめのものについては、K自ら個人的な話を「私」に話したことの強調と同時に、そのことがきっかけで、Kが影にこだわりを持つようになったという推察を「あなた」にそっと打ち明けるのである。

そこでもう一度、「あなた」という人物について考えたい。「あなた」という人物について読者であるわたしたちに知らされていることは限られていて、特定の「誰か」に結びつけることは極めて困難だといえよう。しかしその一方で、本作品の冒頭が「お手紙によりますと、あなたはK君の溺死について…」と始まるように、Kの死を「私」に告げる大事な役割を担っており、「私」はKとの過去の出来事について語る際に、「あなた」の存在を意識し、かつ「私」は「あなた」と一面識もないはずであるのに、「あなた」のことを知っているかのように親しげであることは明らかであろう。

これらのことを踏まえると「あなた」が実在する人物ではないと考えることはできないだろうか。「あなた」という存在は、「私」がKの死について何らかを告白するために設けた架空の人物であると考えることはできないだろうか。「あなた」という存在の手掛かりとなる情報は、作品中からほとんど確認できない上に、「私」自身「あなた」については、一切知る由もないことを強調し距離を保っている。しかし一方で、Kの込み入った事情に関する話題に対し、実に意図的に含みのある言葉を添えている。「あなた」の立ち位置が見ず知らずの他人である一方で、妙に近しい存在でもあるという二面性は、そもそも「あなた」は「私」が意図して設けた存在だということを暗に示していると、わたしは考える。

三、「私」とK

まずは「私」とKの関係について述べている先行研究を挙げ、それらを参考に二者の関係を考察していく。

> はっきりしているのは、事実としてあったのは「Kの溺死」であるということだ。「Kの昇天」とは、「私」がこの事実に対してはたらかせた想像の世界での出来事である。（中略）「Kの溺死」を「Kの昇天」として納得するということは、「私」によって語られたKの死の意味

付けを受け入れるということに他ならない。（中略）Kにとって「私」はまさしく自分の影が実体化した姿に他ならなかった。（中略）「私」は「影」である自身が「Kの昇天」に深く関与していることを物語ってしまっていることを物語ってしまっている。しかも、「私」はそのように「Kの溺死」を描き出すことで、今自分が「現実」の中で生きていく道を歩んでいることを、高らかに宣言しているのである。（島村輝氏[5]）

「人」を使わず「影」を伴うことによって「人」と「影」との合体、と同時に両者の分離を潜在的に予想させる語彙になっている。（中略）Kのみならず「私」も「影」の神秘を解し得る人物であることを物語っていよう。「私」の想像するKは、イカルスのように墜落することなく、人格を持った「影」に導かれ、魂は月光を遡って昇天し、体は干潮の高波に翻弄されてしまったのである。（中略）Kの溺死は、「昇天」と見做されることにより、美的空間への転身と捉えられたのである。Kの昇天という捉え方は、Kの溺死という事実を越えKと「私」とが二人で紡ぎだした美的幻想であったのである。（濱川勝彦氏[6]）

Kと同じ価値観を共有する〈私〉が、影に魅せられ、いつかは月に照らされた影に自分の分身が現世の自分を超越して、月へ飛び立ち、地上における肉体の自分が滅んでいくことを希求した〈私〉が、身代わりのようなKとの出会いによって、自分を見つめなおすことができたのであった。逆説になるが、現実の存在から消えつつあるKに再生の力をわけてもらい、現実社会に適応するよう、やり直しを決意したということである。（陳蘇黔氏[7]）

濱川勝彦氏や陳蘇黔氏はともに、出会った当初から、絶えず影にこだわるKに対して、「私」が理解のある態度で接していると考えている。また、島村輝氏や濱川勝彦氏が述べている、Kの死を昇天と意味づけ、幻想世界に閉じ込めることで、「私」自身は現実世界を生きていくのだという考えは、本文中の「私が稍健康を取戻し、此方へ歸る決心が出來るやうになつたに反し、K君の病氣は徐々に進んでゐたやうに思はれます。」という部分に着目していると考えられる。そして、病が快方に向かい、Nを去る「私」に関して、島村輝氏

は、『私』はそのように『Kの溺死』を描き出すことで、今自分が『現実』の中で生きていく道を歩んでいることを、高らかに宣言しているのである。」と述べ、濱川勝彦氏は、「Kの昇天という捉え方は、Kの溺死という事実を越えKと『私』とが二人で紡ぎだした美的幻想であったのである。」と考えており、また、陳蘇黔氏は「私」が「現実の存在から消えつつあるKに再生の力をわけてもらい、現実社会に適応するよう、やり直しを決意したということである。」と述べている。

わたしは、彼ら三者がいうように、「私」がKとは異なる世界で生きていく結果となったという考えにはいくらか納得できない。なぜならば、もともと「私」自身が病に侵されていたという点が軽んじられているからである。以下は、作品中の「私」の様子について書かれた部分の引用である。

それは何時頃だつたか、私がNへ行つてはじめての滿月の晩です。私は病氣の故でその頃夜がどうしても眠れないのでした。

「私」がKと出会うことになったのは、先の文にもあるように「私」が療養のためにNという場所を訪れていたことがそもそもの始まりなのである。病名や病状についてこそ本文中では詳しく書かれることはないが、どのような病であれ、夜も眠れずにいる「私」が精神的に不安定な状態にあることは確かであろう。

そこで、病のために不安定な状態である「私」が語るKと出会う前の場面での情景描写に、影を意識した表現があることに注目したい。

・その晩もとうとう寐床を起きて仕舞ひまして、幸ひ月夜でもあり、旅館を出て、錯落とした松樹の影を踏みながら砂濱へ出て行きました。

・引き上げられた漁船や、地引網を巻く轆轤などが白い砂に鮮やかな影を落としている他、濱には何の人影もありませんでした。

これらは、「私」がKとの出会いを語る最初の部分を引用したものである。この時点で「私」はまだKの姿すら目にしていないにもかかわらず、本文中に既に影を意識した表現があるのだ。そして、その後「私」が浜辺でKを見つけ、不審

に思いながらも興味を持ち、恐る恐る話しかける場面へと入るわけだが、ここでもKから「影の話」を聞く以前に、「私」はKのことを十二回も「人影」と表現しているのである。以上のことからは、「私」がKからの影響で影に意識が向くようになったというよりも、Kと懇意になるよりも前からすでに影にとらわれているといえるのではないだろうか。

この点を踏まえたうえで、「私」とKとの関係性について考察していきたい。「私」にとってKはどのような存在であったのだろうか。

Kとの出会いは「あの療養地のN海岸で偶然に」見かけたことがきっかけである。海を眺めていた「私」が視線を浜辺へと移すと、そこには自分以外に一つの人影に気づく。「私」は、その人影（後のK）が何か落し物を捜すように砂浜を行ったり来たりする様子が気がかりであった。何とか気を引こうと口笛を吹きてみるものの、何の効果もない。そこでいよいよその人影に近づいていくうちに、「彼の人」が落し物を捜しているのではなく、「影を踏んでゐる」ところを見てしまう。意を決して人影に話しかけると、深い瞳のKが振り返り、極まり悪そうに「自分の影を見てゐた」と言う。

この場面で、一つ注目すべき点は、「私」はKが影を踏んでいるのを目撃したというのに対し、Kは自分の影を見ていただけだといっていて、両者に食い違いが生じているところである。この相違が単なる「私」の見間違いに留まることではなく、実在として在る本来のKと「私」を通してみるKに違いが生じていることの表れだとわたしは考える。

先にも述べたように、「あなた」という人物は、Kという人物について語るために「私」によって設けられた架空の存在であるということや、「私」がKを砂浜で見かけて、話しかけようと近づいた際に、「私」はKがKの影を踏んでいるところを見てしまったと語っているのに対して、Kは「私」に砂浜で一体何をしていたのかと問われたときに、自分（K）の影を見ていたという食い違いが生じているということを踏まえて、本作品について改めて考えると、わたしは、この物語が、病によって不安定な心持である「私」が、実在するKと「私」が生きる現実とは異なる、幻想の世界を同時に持ち合わせ、「私」の中でその二つの世界が併存するということを「私」自身が認識しており、その不可思議な世界観を「あなた」という架空の他人を設け、告白している物語であると考える。

次に引用するものの語り方に注目してみようと思う。

――といふ譯は、自分は自分の經驗でさう信じるようになつたので、或は私自身にしかさうであるのに過ぎないかも知れない。またそれが客觀的に最上であるにした處で、どんな根據でさうなのか、それは非常に深遠なこと、思ひます。どうして人間の頭でそんなことがわかるものですか。――これがK君の口調でしたね。何よりもK君は自分の感じに頼り、その感じの由つて來たる所を説明出來ない神秘のなかに置いてゐました。

然し私はその直感を固執するのではありません。私自身にとつてもその直感は參考にしか過ぎないのです。本當の死因、それは私にとつても五里霧中であります。

一つ目の引用は、Kが影について語る様子を「私」が間接引用で説明する場面である。これは、間接引用であることからもわかるように、このKの発言には少なからず「私」の介入があるといえるだろう。そして二つ目は、「私」が「私」の直感をもとに、Kの最期について語りだす直前の断わりの部分である。この二つの引用はそれぞれ直感の来たる所について語っている場面であるが、直感の由って来たる所が「神秘」であることと、「本當の死因」が「五里霧中」であるというように、それぞれがこだわっていることに対する考え出所を巧妙に暈しているという点で酷似しているといえよう。この類似点からも、Kという人物がある点で非常に「私」に似ているということがいえる。

そしてここで、「私」が語るKの最期の瞬間について考えたい。

まず「私」は、あくまで自分の直感をもとに、「その不幸な満月の夜のことを假に組み立て」ようと思う、と幾らか大げさな断りを入れる。そして、本暦で調べたというデータをもとに、月齢や月の出、月が南中する時刻を細かく並べ、Kが海へと近づく様子を推察し語り継いでいく。以下は作品末尾からの引用である。

私はK君が海へ入ったのはこの時刻の前後ではないかと思ふのです。私がはじめてK君の後姿を、あの満月の夜に砂濱に見出したのもほゞ南中の時刻だつたのですから。そしてもう一歩想像を進めるならば、月が少し西へ傾きはじめた頃と思います。若し左うとすれば、K君の

所謂一尺乃至二尺の影は北側と云つても稍東に偏した方向に落ちる譯でK君はその影を追ひながら海岸線を斜に海へ歩み入つたことになります。

K君は病と共に精神が鋭く尖り、その夜は影が本當に「見えるもの」になつたのだと思はれます。肩が現はれ、頸が顕はれ、微かな眩暈の如きものを覚えると共に、「氣配」のなかゝら遂に頭が見えはじめ、そして或る瞬間が過ぎて、K君の魂は月光の流れに逆らひながら徐々に月の方へ登つてゆきます。K君の身體は段々意識の支配を失ひ、無意味な歩みは一歩々々海へ近づいて行くのです。影の方の彼は遂に一箇の人格を持ちました。K君の魂はなほ高く昇天してゆきます。そしてその形骸は影の彼に導かれつゝ、機械人形の様に海へ歩み入つたのではないでせうか。次いで干潮時の高い浪がK君を海中へ仆します。若しそのとき形骸に感覚が蘇つてくれば、魂はそれと共に元へ歸つたのであります。（中略）

K君の身體は仆れると共に沖へ運ばれました。感覚はまだ蘇りません。次の浪が濱邊を引摺りあげました。感覚はまだ歸りません。また、沖へ引去られ、また濱邊へ叩きつけられました。然も魂は月の方へ昇天してゆくのです。

遂に肉體は無感覚で終わりました。干潮は十一時五十六分と記載されてゐます。その時刻の激浪に形骸の翻弄を委ねたまゝ、K君の魂は月へ月へ、飛翔し去つたのであります。

この引用からもわかるように、「私」の語り方が、はじめのうちは、丁寧に「～と思います」と「不幸な満月の夜のこと」を、想像をもとに語る様子が窺えたが、引用部分にもあるように、Kにとって「影が本當に『見えるもの』になつた」直後からは、一転して、今まさに目の前で起きていることのように確信を持った口調に変化していることは明白である。この転換は、先に述べた「私」の不安定さや、「私」が現実とは異なる世界を持っているということを如実に表している部分である。そして、作品冒頭ではあたかも「あなた」という人物から突然受けた手紙への返信という形をとっていたにもかかわらず、作品末尾ではみごとに破綻してしまっているのである。

以上の点を踏まえて考えると、この作品は、冒頭で手紙の返信という形を提示しながらも、最後はKの死に立ち会った

かのような臨場感のある語りへと変化することや、その途中途中で、「私」がこの物語を語るために作りあげた「あなた」という人物に対して同意を求めるような、非常に意識的な一言が挟み込まれていること、語り手であるの語りが不安定であることが実に巧妙に描かれているということが、一つの魅力であるとわたしは考える。

1 梶井基次郎『梶井基次郎全集』第1巻　筑摩書房　1999年11月
2 陳 蘇黔「梶井基次郎「Kの昇天――或はKの溺死」論」東京都立大学国語国文学会『都大論究』(36), 41-52, 1999-06
3 大塚常樹「梶井基次郎「Kの昇天――或はKの溺死」の構造と戦略」お茶の水女子大学国語国文学会『国文』(94), 66-77, 2001-01
4 島村輝「梶井基次郎「Kの昇天――或はKの溺死」（読む）」日本文学協会『日本文学』39（1), p68-71, 1990-01
5 4と同じ
6 濱川勝彦「Kの昇天――或はKの溺死」――Kと「私」との共同幻想（特集 梶井基次郎を読む）――（作品を読む）至文堂『国文学解釈と鑑賞』64（6), 105-109, 1999-06
7 2と同じ

（みずしま・ゆう　成城大学大学院博士課程前期）